

豊田市
郷土資料館
だより
No.67

Toyota City Museum
Of
Local History

目次

- ・「ヲチヤガネノ峰」の古墳を追う 2・3
- ・ある兵士の「奉公袋」—資料が伝えるもの 4
- ・埋蔵文化財調査ニュース 5
- ・「近代化遺産の保存と活用 基本方針」について .. 6
- ・市史編さん事業紹介 7
- ・文化財シリーズ67・資料館 NEWS 8



尾三バス、走る！

「ヲチャガネノ峯」の古墳を追う

—宮内庁所蔵資料調査報告—

平成18年に宮内庁書陵部が刊行した図録に、「愛知県西加茂郡保見村伊保堂根ヲチャガネノ峯」から出土した円筒埴輪が掲載されています。遺跡台帳にはない古墳ですが、似た名称として『保見町誌』（昭和54年刊）に「知夜ヶ峯古墳」があり、「勾玉、須恵器、石室」と記されています。所在地は保見町北山。式内社射穂神社から南東へ舌状に延びる丘陵先端部、保見町公民館の北方50mの小高い位置にあり、南東方向には古墳時代の集落として著名な伊保遺跡を一望することができます。現在は保見神社が位置する平坦地となり、片隅に高さ1.5m、長軸8mほどの楕円形の高まりがあります。その上には石碑が建てられていますが、これが古墳の残欠である可能性もあります。

今年1月に宮内庁へ資料調査に行きました。宮内庁には、同じ保見地区にある「根川1号墳」の装身具も保管されていました。『三河國西加茂郡誌』（明治25年刊）によれば、根川1号墳は明治18年に村人が発掘し、直刀・鉄鏃・鈴付き馬具・土器数十点と「曲玉管玉大小九十顆金環」が出土しました。これらは、明治27年に埋め戻され、昭和22年に再発掘された後に再び埋め戻されています。宮内庁には各種の玉が1点ずつあるため、抽出して献納したのかもしれませんが。なお、今回の調査で、大きい方のガラス玉は、斑点状の模様をもつトンボ玉であることがわかりました。トンボ玉を出土した古墳は、県内では岡崎市岩津2号墳、豊橋市馬越長火塚古墳・磯辺大塚古墳で確認されているのみです。また、ヲチャガネノ峯の埴輪は須恵質に硬く焼き

上がっており、8点の破片が保管されていました。

さて、宮内庁書陵部に保管されている『諸陵寮回議冊』には、明治19年に愛知県令から宮内大臣伊藤博文に宛てた「皇子皇孫御陵墓発見之儀ニ付上申」という文書が残されています。「三河国西加茂郡伊保堂村並下伊保村等ニ於テ古墳発見之旨届出…」と始まり、「字茶白山ノ古墳」「字山洞ノ古墳」「字チャガ子ノ古墳」という3基の古墳を皇族の墓と考えて、宮内省に詮議を求めたものです。

茶白山は根川1号墳所在地の明治9年までの字名、山洞は昭和50年代に調査された山洞3・4号墳のいずれかと理解できるのですが、「チャガ子」という字名は『愛知県地名集覧』（明治15年刊）などでも確認することができません。そこでヒントになるのが、初代西加茂郡長田中正幅が記した前出の『三河國西加茂郡誌』です。「古墳墓」という項目には、猿投山にある陵墓参考地「大碓尊御墓」に続き、根川1号墳・山洞古墳を指す伊保村大字伊保堂の「伊保堂古墳」、さらに「殿貝津古墳」が伊保村大字殿貝津字知夜ヶ峯にあること、三河国造知波夜命と何らかの縁があってこの名称が残っているのではないか、ということが説明されています。

『諸陵寮回議冊』の文書には「所管郡長



根川1号墳の装身具



知夜ヶ峯古墳の現況



ヲチャガネノ峯で採集された埴輪(いずれも宮内庁書陵部所蔵)

ヨリ別紙之通申出候」「郡長申出之通ニ」という記述が見えます。残念ながら別紙は残されていませんが、明治19年の宮内庁宛文書には、田中正幅が関わっていたことを十分に推測させます。根川1号墳発掘の時は、「皇族の墓が見つかった」と村中がお祭り騒ぎだったと土地の古老に聞いたことがあります。その熱も冷めぬ翌年に、歴史家でもあった田中正幅が積極的に働きかけて、宮内省へ詮議を求めたのでしょう。『三河國西加茂郡誌』『諸陵寮回議冊』ともに、「殿貝津古墳」「チャガ子ノ古墳」を三河国造に関連づけて理解していること、古墳の並びが同じであることから、『三河國西加茂郡誌』にある「殿貝津古墳」が『諸陵寮回議冊』にある「チャガ子ノ古墳」であった可能性が高いと言えます。

一方、『諸陵寮所蔵古器取得事由調査資料』には、「伊保堂茶白山古墳」として、「明治十八年発掘」「大沢清臣義実検ス」「後、増田義モ調査セリトイフ」とあります。チャガ子ノ古墳の埴輪と一緒に保管されている（おそらく埴輪を包んでいた）紙には、「保見村大伊保堂根俗ニヲチャガネノ峯ニテ採取ス四十四年十二月六日午前十時」とのメモ書きがあります。大沢・増田両人の在任期間から推定すると、大沢氏は明治19年以降の比較的早い時期に、増田氏は明治44年に現地を訪れているようです。つまり、ヲチャガネノ峯で埴輪を採集したのは増田氏ということになります。また、根川1号墳の装身具は諸陵寮（書陵部の前身）の目録に記載されているため、宮内省へ詮議を求めた文書とともに献納されたと考えられるのに対し、埴輪は記載されていないことから、増田氏が現地検分後に参考資料として持ち帰ったものと思われる。

ここで問題となるのが、紙に記された位置です。保見村の下には、殿貝津でなく大伊保堂根と記されており、伊保堂を指すと思われます。とすれば、増田氏が

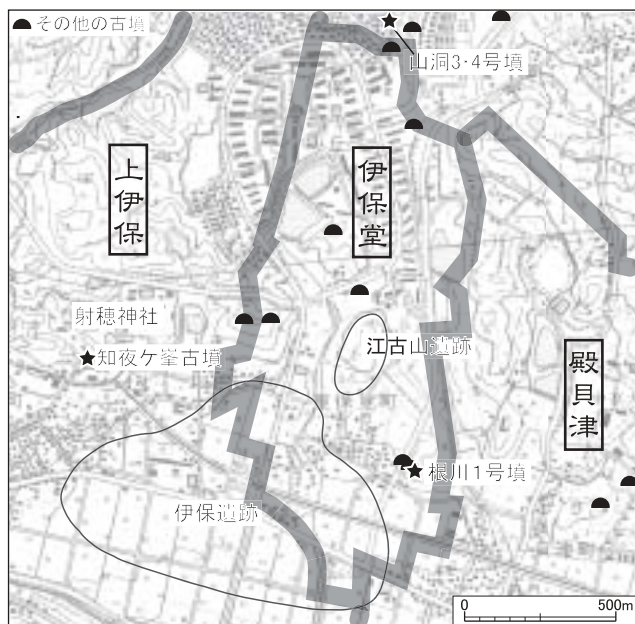
訪れたヲチャガネノ峯は、明治19年の文書の字チャガ子ノ古墳とは別物でしょう。『三河國西加茂郡誌』は、伊保郷に知夜ヶ峯と呼ばれる場所が三ヶ所あることを記しており、それを書いた田中正幅も明治41年に亡くなっています。増田氏は根川1号墳を実検した際に、字チャガ子ノ古墳も訪れたと思われますが、その際に別のヲチャガネノ峯に案内された可能性があります。これが『保見町誌』の知夜ヶ峯古墳であればいいのですが、この場所も大字伊保堂ではなく、正確には西隣の大字上伊保です。増田氏が大字名を根川1号墳と同じ伊保堂と誤認したのか、あるいは大字伊保堂に第三の「知夜ヶ峯」があったのかは今はわかりません。

最近、東保見町在住の八木浅次郎氏（90歳）より、『保見町誌』のいう知夜ヶ峯古墳の場所を地元では「ヲチャガネ」と呼んでいたこと、ここに古墳があったという話を聞いたことがある、という証言を得ることができました。おそらく知夜ヶ峯という本来の地名に「御」をつけたものになまった呼び名でしょう。現状ではこの場所が最有力候補と言えるかもしれません。

根川1号墳では、現在でも埴丘から円筒埴輪の破片を採

集することができます。薄手で須恵質に硬く焼きあがった破片は、ヲチャガネノ峯の古墳から増田氏が採集したものとうり二つで、いずれも6世紀中葉に操業していた上向イ田3・4号窯（亀首町）の製品である可能性が高いと考えています。上向イ田3・4号窯は根川1号墳の北東1.7km、知夜ヶ峯古墳の東2.7kmに位置しており、当時の社会の領域や流通を考える上で、非常に重要な資料となります。

しかし、根川1号墳・知夜ヶ峯古墳ともに、残念ながら情報が断片的です。「知夜ヶ峯」と呼ばれた場所は、どこにあったのでしょうか。また、田中正幅には『伊保堂古墳考』という著作があるようですが、現在では確認することができません。貴重な情報をご存じの方がいましたら、是非お知らせ下さい。（森 泰通）



周辺の古墳分布と旧大字名 (1/25,000)

ある兵士の「奉公袋」 ～資料が伝えるもの～

豊田市郷土資料館では、市内から郷土ゆかりの歴史資料・民俗資料の寄贈を受け入れています。平成20年度にご寄贈いただいた資料から「奉公袋」を紹介します。

「奉公袋」は、戦争中に兵士が戦地に赴く時に必需品を入れた袋で、いつ召集されても良いように日頃から準備しておくものです。布製で大きさ縦34cm横23cmほど、表面には所有者の名前が書かれています。裏面には「収容品」として「軍隊手牒、勲章」「適任証書、軍隊ニ於ケル特業教育ニ関スル証書」「召集及点呼ノ令状」「其ノ他貯金通帳等応召準備及応召ノ為必要ト認ムルモノ」とあり、この中に入れるべきものがわかります。



今回寄贈いただいた「奉公袋」は、挙母町大字挙母出身の鈴木良男さん（大正5年生）のものです。この中には丁寧に畳まれた書類や手牒など当時から、そのまま保管されていたのかと思われるほどの状態で残されています。

中身を見てみましょう。「補充兵手牒」ここには昭和11年12月14日から3日間行われた帝国在郷軍人会挙母町分会主催の「補充兵教育召集令状」（挙母青年学校にて開催）と昭和14年8月8日から12日、トヨタ自動車工業挙母工場分会長名で出された「教育召集令状」（トヨタ自動車工業株式会社プレス工場東側広場にて開催）が挟まれていました。次に、「支那事变ニ従軍シ功績アル者ノ身分異動報告上ノ心得」、「十一年式輕機関銃取扱上ノ参考」といった冊子。貴重品袋に入れられた支那事变従軍記章、帝国在郷軍人会会員徽章（箱のみ）そして、「召集令状受領後入隊迄ノ日課予定表」と印刷された紙と手書きで便箋2枚に書かれた「入隊の挨拶」（原稿）があります。召集令状受領後の予定

表には「受領当日、会社の諸手続きを終了し神仏礼拝」、「第一日、家事の整理、親戚知己挨拶」「第二日、軍人勅諭の奉読、携行品服装の点検、令状裏面熟読、歓送に対する挨拶の原稿作製」と印刷され、手書き文字で「挙母神社、猿投神社、熱田神宮（参拝と同時に名古屋の親戚に挨拶）」とあり挨拶すべき人の名前が連記されています。実際に何日に令状が届いて、何日に入隊するのかわかりませんが、職場や近所の人そして親戚への挨拶を行いあわただしく出征していく様子が想像できます。



「奉公袋」の中にはこの他に、戦地から荷物を送るように自宅の住所と父親の名前が書かれた荷札と包み紙。さらに両親宛の「遺書」、この遺書の封筒には自分の「髪の毛」と「爪」も入れられています。遺書を書く事、遺言の準備は出征の心得にも明記されており、兵士は死ぬ準備を求められた事がわかります。

そしてもう一つの貴重品袋には銃弾が数点、常備薬でしょうか塗り薬、安全ピン、何かの鍵、そして小さく切られた写真のフィルムが10点入っていました。写真フィルムは赤ちゃんを抱いた女性や子どもなど、どれも家族と思われる人物の写真です。銃弾に巻かれるようにして入っていたフィルムは戦地に持って行ったものでしょう。

兵士は国のため、軍人としての責務を果たすためにと戦地へ赴きますが、個人としてどれほどの苦悩があったのか、残された家族の思いはどれほどのものであったのか「奉公袋」の中身は歴史を伝えるのみでなく戦時期を生きた一人の人間の姿をも伝える資料といえます。（伊藤智子）



どうたくん

埋蔵文化財ニュース



すえちゃん

○今町宮之後遺跡（今町4丁目）



【溝と区画地の石積み】

安永川の水路工事に伴う3,700㎡と仮設水路敷設に伴う1,000㎡の調査をしています。事前の試掘調査から古代の遺跡が存在すると考えられ、現在、表土層を取り除く作業がほぼ終了し、古代から江戸時代の遺構が見つっています。古代では、奈良時代の住居跡が見つかり須恵器、土師器が出土しています。中世は井戸2基と多数の柱穴が見つかり、常滑焼の甕や山茶碗などの日常雑器が出土しました。江戸時代ではこぶし大の円礫を並べた石積みが調査区内の広い範囲で見つかりました。石積みは数条の溝と方形の区画を形成しています。石積みはきめの細かい砂が厚く堆積した地層の上にあり、堆積土中から江戸時代の陶磁器が出土しています。また、堆積層の下には古代の遺構が広がっています。

○千石遺跡（上野町1丁目）

寺部土地区画整理事業に先立ち調査を行っています。今回の調査区は豊田北高校の北東約200mの地点で、約4,600㎡を調査しています。資料館だより66号で紹介した木樋が出土した同じ調査区の別地点のおよそ10m四方の区画から縄文時代後期のどんぐりを貯蔵した穴がたくさん見つかりました。これらの穴のうち幾つかは良好な状態で見つかり、コナラ・アベマキ類などが出土しました。東海地方では調査事例が少なく、貴重な発見です。



【どんぐりの出土状況】

○宮平遺跡（足助町宮平）

消防設備建設に先立って約80㎡を調査しました。遺構のある地層まで表土から160cmほど掘削すると、奈良時代の竪穴建物1棟が姿をあらわしました。遺構の残存状況が極めて良かったため、住居の床まで70cm以上も掘り込んでいたことがわかりました。



【竪穴建物跡】

この他に亀首遺跡〔亀首町本郷〕、宮ノ後遺跡〔足助町宮ノ後〕の調査を行っています。

（杉浦 裕幸）

「近代化遺産の保存と活用 基本方針」について

近代化遺産とは、江戸時代末期から第二次世界大戦終了時（豊田市においては、近代の範囲の下限を「豊田市」に市名を変更した昭和34年に設定しています）までに、近代的手法によって造られた、産業・交通・土木に関わる建造物（各種の構築物、工作物を含む）を指します。「遺産」というと、埃をかぶったような古くて役に立たないもののような印象があるかもしれませんが、近代化遺産の「遺産」は世界遺産の「遺産」と同じように、後世に引き継ぐべき大切なものという意味で使われています。

豊田市では、近代の産業とくらし発見館（以下「発見館」）を一つの拠点として、市内に点在する近代化遺産の保存と活用について積極的に取り組んでいます。しかし、悠久の歴史を持ち、豊富な文化財が所在する豊田市で、なぜ近代化遺産を特に取り上げるのでしょうか？その主な理由として、近代化遺産が持つ次の3点の特長を挙げることができます。

まず1点目は、近代化遺産は直接目に見ることができ・触れ・体感できる物件が多いことです。近代化遺産は、土に埋もれている遺跡や嚴重に保管されている美術工芸品などとは違い、現在も稼働している物件もあるなど、日常の生活に身近な存在です。したがって、市内外の人が気軽に訪れることが可能です。

2点目は、現代に最も近い過去である近代につくられたものであり、現在の生活とも関連性があるため、比較的わかりやすい文化財であることです。特に市域の近代化遺産は、「自動車産業のまち」とそれ以前の豊田市域の成り立ちを結ぶ接点ともなっており、原始・古代から連綿と続く豊田市域の歴史への入口となります。

3点目は、近代化遺産にはその遺産がある土地の地域的特性が形となって現われていることです。用途・規模・立地や建設年代等によって近代化遺産にもさまざまな種類がありますが、その遺産がその場所に存在する理由・必然性があるという点は、すべての遺産に共通しています。したがって、個々の近代化遺産から地域的特性を抽出し、その独自性を発信することも可能です。

このような特長を持つ近代化遺産は、市域の地獄的な特色を表す「地域資源」として捉えられます。そこで豊田市教育委員会では、「近代化遺産の保存と活用基本方針」（以下「基本方針」）を策定し（平成19年度）、地域の歴史・文化の継承と、地域的特色を活用した地域活性化により、豊田市の都市としての魅力の向上を目的として、地域資源としての近代化遺産の保存と活用を図っているのです。

基本方針では、目的を達成するための目標として、市域全域を対象とした豊田市型の「エコ・ミュージアム」の構築を掲げています。そして目的達成のための方法として、登録や指定などの制度を利用して近代化遺産を文化財として積極的に認定すること（価値や認知度の向上）、発見館の活動を推進・発展すること（近代化遺産の情報発信とネットワーク化）を図っています。

豊田市内には数多くの魅力的な近代化遺産が点在しています。基本方針に一覧で掲載しただけでも約100箇所を数えます。これらの近代化遺産というモノの背後には、人々の生活や技術、産業など遺産に関係するさまざまな「物語」があります。その物語を紡ぎ出し、市民との共働によって地域に光を灯し続けることが、基本方針の実現には肝心要です。実際、基本方針の策定に先行して開館（平成17年度）した発見館の活動は、その物語を大切に扱っています。

発見館の開館以来の地道な活動により、近代化遺産の文化財への指定・登録や、地元の有志との共働による近代化遺産の活用など、徐々に成果が表れつつあります。これらの活動を背景に、来年度は全国近代化遺産活用連絡協議会の全国大会が豊田市で開催される（7月23・24日予定）など、近代化遺産の保存と活用に向けて新たな展開が始まろうとしています。

地域資源または資産としての文化財の活用は、近代化遺産に限られるわけではありません。先人から引き継いだ多くの遺産が、地域の魅力を感じる文化「財」として、より市民に身近な存在になることを願っています。

（天野 博之）



平成20年度の活動について

新修豊田市史の編さんは、200名以上の委員が原始や古代・中世、自然など10部会にわかれて、調査活動を行っています。

【原 始】

旧石器時代では、昨年豊田市に寄贈された石器と『豊田市史』に掲載されている実測図との照合作業を行っています。

縄文時代では、県内有数の中期の遺跡である大砂遺跡（旭地区）の遺物整理と足助地区の石器の実測図や土器の拓本を作成しています。

古墳時代では、市内から出土した鏡や装身具を所蔵している大阪歴史博物館、宮内庁書陵部の調査を行いました。

【古代・中世】

基礎資料として、『豊田市史』『稲武町史』『愛知県史』などに掲載されている資料を三河地域まで広く抽出し、カード化しました。

また、国立公文書館、宮内庁書陵部、国立国会図書館などの所蔵資料調査も行いました。

【近 世】

月1回の定例調査を行い、資料編1に収録する藤岡、小原、旭、稲武地区の区有文書を中心に25資料群の調査を終了しました。

また、愛知県史の調査で数多くの古文書のマイクロフィルム撮影が行われましたが、愛知県の許可をうけその複製フィルムを作成しました。

【近 代】

月1回の定例調査を行い、支所で保管する合併旧町村の行政文書や、地域資料館で保管している区有、個人文書を中心に調査を行っています。

【現 代】

豊田市や合併旧町村で発行された広報誌を確認し、調査項目の選定を進めています。

【自 然】

豊田市の自然環境の概略を把握するための基礎調査に重点を置いた活動を行いました。

○気象・気候

市内40地点にデータロガーを設置し、四季それぞれ1か月間、気温、湿度の観測を行いました。

○地形・地質

千石遺跡（上野町）と伊勢神湿地（明川町）でボーリング調査を実施し、採集試料の年代測定と花粉分析を行いました。

○生物

100名以上の調査員が、植物、菌類、昆虫類、鳥類、淡水魚類など10分野にわかれ、合併旧町村における生育・生息調査を行いました。

○水文

市内約150～250地点で、四季ごとの河川や井戸の水質調査（水温、電気伝導度、PH など）を行いました。

【民 俗】

月1回の合同聞き取り調査を行い、市内13自治区190名の方々から昭和30年代を中心とした暮らしや仕事などについてお話をうかがいました。

【美術・工芸】

寺院やお堂にある彫刻（仏像）、仏画の予備調査を週1回行い、19、20年度の2年間で350か所終了しました。予備調査では、新たに藤原仏5軀、鎌倉時代末から南北朝期の阿弥陀三尊来迎図1幅などを発見しました。予備調査で発見された仏像や指定文化財の仏像を中心に、21の寺院・お堂で仏像33軀、絵画2幅の本調査（写真撮影や細部観察）も行いました。

【建 築】

旧市内にある浄土宗・浄土真宗17寺院の調査（平面図作成や写真撮影など）を9月から10月に行い、旧市内の社寺調査はほぼ終了しました。8月には足助地区の神社14社の調査、2月には21年度調査のために旭地区の神社44社の予備調査も行いました。

また、農家、町家の予備調査も月1～2回行い、調査対象をリストアップするとともに、過去に調査された建物が現存しているかどうかの確認もしています。

【概要版】

『豊田市史』や『小原村誌』など、これまでに刊行された史誌を基に作成された第1次原稿を検討し、第2次原稿の執筆を行っています。（鈴木 昭彦）

文化財シリーズ



人形浄瑠璃の首と衣裳 愛知県指定有形民俗文化財

江戸時代に上演されていた人形浄瑠璃の人形の首45個と衣裳30点が昭和42年8月28日に愛知県有形民俗文化財に指定されました。首は「道化」や「大舅」「三枚目」「舅」「鬼一」「三番叟」「娘」「老女」「仏師」「検非違使」「山姥」「団七」など役柄にあわせたものです。木地を彫り胡粉を塗った造りの人形は、喉木も同一の木で彫ってあるものと喉木が別に作られているものがあります。形式も恵那系(関西)と伊那系(関東)の二つの系統を引いたものと考えられ、古浄瑠璃の人形と思われるもの、一つのものが別の人形に作り変えられたものなど長い年月の間、この人形が使用され、修理され、大切にされてきた事が知れます。

小田木地区では明治10年頃以降、人形浄瑠璃を上演されることは無くなりましたが、宝暦2年(1752)の紀年銘の有る首もあり、また昔から「人形田」と呼ばれる共有地があって、この田の作米で浄瑠璃練習時の費用にあてていたと伝えられるほど盛んでした。



資料館NEWS

「おこしものづくり」を開催しました。

2月28日から3月1日まで開催した「おこしものづくり」講座には、約170人の方が参加されました。申し込みが多く、講座日を追加しました。



おこしものづくり

今年は男性の参加が多く、熱湯を注いだ米粉を一生懸命にねる姿が印象的でした。

「春休み こども週間」を開催します。

3月20日から4月5日まで「春休み こども週間」を開催します。投扇興(とうせんきょう)・竹てっぽう・



紋きりあそび

貝あわせ・けん玉・だるま落とし・竹ぼっくり・メンコ・おはじきなどの昔のあそびが体験できます。また、紋きりあそびや貝合わせなどのワークショップも随時開催します。

近代の産業とくらし発見館 企画展

「尾三バス、走る!」の関連行事、座談会「尾三バスの思ひ出」が3月1日に開催されました。「尾三自動車株式会社」を創業した浦野、本多両氏のご子孫と車掌や事務員をされてみえた方々が、当時の様子を生き生きと語られ、会場が昭和初期にタイムスリップしたかのような錯覚を味わうことができました。また、尾三バス初代の車両である「T型フォード」の特別展示では、トヨタ博物館の学芸員の説明とともに、乗り心地を体験することができました。

T型フォード展示



座談会「尾三バスの思ひ出」

利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.67■

平成21年3月30日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL : <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。